

「街の商店」

競泳男子平泳ぎで、連続2度のオリンピック2冠に輝いた北島康介さん。その実家の精肉店「北島商店」が閉店した。その店は荒川区西日暮里にあり、千住からもさほど遠くない。名物のメンチカツサンドは、もともと販売していなかったが、20年前の世界選手権の平泳ぎで2冠などの活躍を契機に、レース前にメンチカツを食べるとのエピソードが有名になり、一般販売されたものだ。特製パン粉でジューシーな牛・豚肉を包み、大きめのタマネギの食感がたまらないという。オリンピック後などは店前に大行列ができ、メンチカツは老舗デパートの地下でも売られた。私も、西日暮里の店に行って買ったことがある。とてもおいしいし、これを食べれば速く泳げるような気がする。しかし、3年前からのコロナ禍の影響は避けられなかった。卸先が減少し、閉店という苦渋の決断となった。

この店の特別な事情もあったかと思うが、街の商店はだんだんと少なくなっているように思う。コロナ禍の影響もあろうが、それ以前から、すべてが一度にそろそろスーパーマーケットやショッピングモールの方が人気だ。元気な商店街もあるが、昔の活気が失われている商店街も多い。我が家の近くにある商店街も、名ばかりになり、かつての賑わいはもうない。夕方は歩行者専用道路にしてはいるものの、あまり人通りはなく、とても寂しく感じる。

最近読んだ、よしもとばななさんのエッセイに、「お買い物かご」というのがある。父親と商店街を歩いて買い物をした昔の記憶から、よしもとさんは「夕方のにぎわう商店街を子どもといっしょに抜けていくと、当時の父の気持ちと自分の気持ちが重なる。買い物かごを持って、お財布と携帯電話だけ入れて、つっかけを履いて子どもと歩いていく自分は、まさに父と同じ姿だ。そして、同じ幸せを感じている」。そんな姿は、少なくなってしまうのだろうか。活気ある商店街を歩くと、なぜか楽しい気分になさせてくれるのは、昔の懐かしい記憶が残っているからか。

2月1日 校長 鈴木 幸雄

◆問題 前回と似たような問題ですが。

図のようなマス目の道があるとき、

AからBに遠回りをしないで

行く道は何通りありますか。

